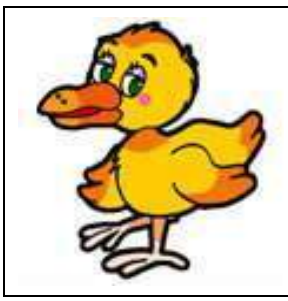


ICT 海外ボランティア会会報

No. 21　（旧、NTTOBSV 会会報）

2010 年 11 月 18 日（木）

Home page　　: http://sv.nttob.org/
e-mail　　: sv@info.nttob.org

目次

◆巻頭言　新たな事業視点を求めて
ドンタム社・役員兼副会長、元スリランカテレコム社長
阿南　修平氏

◆ＩＣＴ海外サポートメンバー顔合わせ合の開催
事務局

◆本会入会者リレー寄稿　ボランティア活動を振り返って
メキシコ派遣中ＳＶ　　横田　悦男氏

◆現地便り
カンボジア派遣中ＳＶ　　須山　勝彦氏

◆ＪＩＣＡ「メールマガジン配信登録」のおすすめ
事務局

巻頭言

新たな事業視点を求めて

ドンタム社・役員兼副会長、元スリランカテレコム社長
阿南　修平

☞　NTT での海外事業経験

ICT 海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ会 会員の方々、ご無沙汰しております。NTT ｸﾞﾙｰﾌﾟでｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ事業を担当し

ていた阿南です。昨年、7 月にこちらﾎｰﾁﾐﾝのﾍﾞﾄﾅﾑ企業（Dongtam 社）に、役員兼副会長として勤務しております。いままで、いろいろな形で海外勤務をさせていただきましたが、今回は全くの異なった役職で会社勤めを行っております。NTT の国際部門に最初に関与させていただいたのは、本会事務局長の加藤隆さんが、BKK の海外事務所長（1985 年）をなさっていたときでした。その後、本多慶成さんが所長(1986 年)をなさっていたｼﾞｬｶﾙﾀ海外事務所での勤務、1993 年には、ﾀｲの TT&T への出向と、最後　２００１年にｽﾘﾗﾝｶﾃﾚｺﾑの社長勤務で、長期間にわたって海外勤務を経験させていただきました。NTT の国際事業では、全てを経験（海外事務所、出向、経営管理、外国企業の CEO)、またｽﾘﾗﾝｶでは、全ての通信事業（固定、国際、携帯、ﾃﾞｰﾀ通信、Voip ｻｰﾋﾞｽ、NGN 導入、海底線敷設、ﾃﾞｰﾀｾﾝﾀ、電話帳発行、ｺｰﾙｾﾝﾀ、新料金、運用保守、局外設備運用保守ｾﾝﾀｰ、網管理ｼｽﾃﾑ、訓練ｾﾝﾀｰ構築、５S.Kaizen 活動等）および事業経営（企業上場、外債発行、国債各付、相互接続等）に関与することを経験させていただいたのではないかと思い、大変感謝しております。

☞　あらたな世界への探索：HCM のﾍﾞﾄﾅﾑ企業へ

HCM へは、弊社の会長の要請によるもので、自分も通信とは異なる分野での外国企業で勤務をも一度経験したいと思いました。また現地での会社経営についてはいろいろ経験しているので、同じ姿勢で対応すればなんとかなるだろうと思い、いろいろな出会いがあるものですが、これも人生のいたずらと、引き受けてしまいました。さらに現地企業で、ｱｼﾞｱの視線にあわせた場合、日本はどのようにみえるのか、発展途上国ではどこが日本の発展と異なるのか、そのようなことも大きな関心事です。発展する企業、伸びない企業、倒産する企業等について、いろいろな過去の経験を踏まえて分析し、常に成長していくような普遍的な会社経営方法は存在するのか、国内事業と海外事業ではなにか大きな差異はあるのか理解すること等も、大変興味のあるところです。

☞　言語障害と言語形態の分析

いろいろな国で事業経験をいたしましたが、ﾍﾞﾄﾅﾑでの苦労は、ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝがﾍﾞﾄﾅﾑ語であるため通訳を入れなければならず、自分の言葉で自由に正確にｺﾐｭｹｰｼｮﾝが図れないことです。これは精神的に大変疲れるもので、その結果、ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝが疎くなりがちで、いまでも苦労しています。いままで滞在した国では、こんなに言語で苦労した経験は記憶にありません。勿論、弊社が全くのﾛｰｶﾙ企業であることは知っていましたが、この苦労は想像以上でした。ﾍﾞﾄﾅﾑ語は、ご存知のように発音から漢字が連携していることが分かります。例えば、改善は、ｶｲﾃｨｴﾝ、理由は　ﾘｭｰ、理論はﾘﾙｱﾝ、代理は、ﾀﾞｲﾘ、発表はﾊﾋﾟｮｳとなり、ﾍﾞﾄﾅﾑ人の名前も、殆ど、漢字でかけます。やさしいようですが、発音が結構むずかしく、さらに言語の並びが、ﾀｲ語、ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ語、英語と全く異なるので、話すとなると大変ややこしくなります。例えば、「営業戦略報告」は、ﾍﾞﾄﾅﾑ語では「報告戦略営業」となります。全く語順が異なるので、少しﾍﾞﾄﾅﾑ語をかじると、文章を覚えるのに頭が痛くなります。　漢字ごと理解し、それらの語順を頭で並べ替えるという操作が必要になります。ｽﾘﾗﾝｶのｼﾝﾊﾗ語では、全く日本語と同じ順序、助詞等をつかい、日本語のように動詞を変化させていきます。日常会話が英語である場合、英語を日本語に頭で並べかえ、それをｼﾝﾊﾗ語に変換しということが起こり

ます。ｼﾝﾊﾗ語を少し勉強しましたが、英語が十分通じるので、途中で断念しました。何故このように各国の言語の語順が違うのか、わかりませんが、どうも世界には、英語ﾊﾟﾀｰﾝ、日本語（ﾀﾐｰﾙ、ｼﾝﾊﾘ、ﾋﾝｽﾞｰ、韓国語）ﾊﾟﾀｰﾝ、そしてその中間をとる、中国語(ﾍﾞﾄﾅﾑ語)ﾊﾟﾀｰﾝの三つがあるのかもしれません。世界の経済発展には、ｱﾒﾘｶ型、日本（ﾄﾞｲﾂ）型、そして中国（その中間）型と異なったﾊﾟﾀｰﾝがあるようですが、言語の違いが、異なった経済発展方法を構築し、世界を動かしているのかもしれません。(勿論勝手な推論です)。企業経営については、幹部の意見や、他社の社員の意見を聞いていると、日本でも海外でも、皆さんの問題意識は、異なっておらず、企業の成長においては、幹部の問題意識に対する社長の対応、認識力、及び意識が大きく関係していることがはっきりしてきました。

☞　ﾍﾞﾄﾅﾑの発展性は期待できるのか

ﾍﾞﾄﾅﾑは、共産主義の国ですが、ｵｰﾌﾟﾝなところがあり、皆さん意見を堂々発表されます。ただ、彼等の話は実に長く、時間を守る意識は少なく、何を言いたいのか、焦点がぼけてしまいます。結論をだすにも判断基準が全く明確ではありません。ﾎﾟﾘｼｰがないとか、ﾎﾟﾘｼｰはこれだとか、理由なしでその場の気分で勝手に決めてしまうことがあり、困惑してしまいます。経営方法も私の経験であるｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞとは異なっていますので、こうすればうまく行くと助言しますが、なかなか理解していただけないです。私の会長は、話がながすぎるので要点だけ、それも判断理由を付けて話したらと言ったら、その後は少し短くなりましたが、判断基準はやはり明確ではありません。自分は何でも決められるという、ｵｰﾅ会社の弱点というのでしょうか。弊社の幹部との会議でもお互いの意思疎通が十分できなく、本当に悩んでいます。最近は、通訳を利用するしかないと、割り切っていますが、私の意図していることをうまく通訳しているのか、いつも疑問をもっています。UK やｱﾒﾘｶからﾍﾞﾄﾅﾑに戻ってきた方とは、問題なく英語で意思疎通ができますが、会長との会談になると、想像の世界が支配してきます。多分こうだろうとか、彼はわかっていないとか。ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝはﾍﾞﾄﾅﾑの発展の大きな阻害要因でしょうし、積極的に海外の経営方法を取り入れて、短期視野の利益追求のみでなく、長期にわたる視野で、社員の育成、顧客重視の事業展開する企業が必要です。それには、海外での事業経験のある英語が操れる越僑の方々の投資やしっかりした起業家が重要な鍵となります。

☞　日本語を勉強している若者

今回の発展途上国の企業での勤務で、身近に発見したことです。日本の発展途上国での投資は国際競争力を維持するために推進されていますが、基本的には、労働力依存、生産拠点の移転、日本国への利益還元でしょうか。この投資方法も必要ですが、今後は中小企業の不要になりつつある沢山の技術、あるいは眠っている技術の移転を行うことも考えて良いのではないかと思われます。日本語を勉強しているﾍﾞﾄﾅﾑ人が沢山いるのに、技術移転による日本語使用はなく、日本企業の投資に際しての単なる便利家としてのみ使用されており、幹部としての登用は少なく、あるいは知的生産活動に殆ど参加していません。大分県別府市に立命館ｱｼﾞｱﾊﾟｼﾌｨｯｸ大学がありますが、そこを卒業したﾍﾞﾄﾅﾑ人で、大体１０％の方しか、日系企業に働いていないようです。９０％の方は、日本語を学んでも、簡単な通訳や、日本語に関

係のない、ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ、ｱﾒﾘｶに企業に就職しているとのことです。勿論日本の経済不況もあり、日本語を喋れるﾍﾞﾄﾅﾑ人の活用に限界があるかもしれませんが、日本語を使って日本の技術を学び、その技術でﾍﾞﾄﾅﾑにおいて事業を自主的に展開させる方法は、日本企業とのﾊﾟｲﾌﾟを大きくしていき、日本シンパをふやし、日本をもっと理解させることになります。また、今後の少子化を考えると、優先的に日本語を喋れ、文化も似ているﾍﾞﾄﾅﾑ人を日本、ﾍﾞﾄﾅﾑで長期間採用してもよいのかもしれません。人生で沢山の時間を、日本語勉強に費やしたﾍﾞﾄﾅﾑ人をみるにつけ、学んでいる姿を覗きみるにつけ、本当に胸が痛くなります。

☞　日本の中小企業および技術の海外展開

日本の中小企業は積極的に海外（特にｱｼﾞｱ）に進出したいと思っておられます。中小企業の方が、心配していることを一手に引き受ける、日本語を喋れるﾍﾞﾄﾅﾑ人を核にした現地企業が必要ではないかと思っています。この現地企業は、中小企業の技術を不安なく導入するためのもので、ﾋﾞｼﾞﾈｽﾓﾃﾞﾙの検討から、資金の調達、契約書作成、技術保護、人材発掘等を引き受けるものです。すべての発展途上国において、資金援助より技術援助のほうが、当該国を発展させ、技術日本との関係が強化されるのではないかと思われます。知識のみでなく、実際の機器を提供して、それを国内の事業に展開させることを教え、支援することもこれからは必要ではないかと思われます。魚を与えるより、船、つり道具を、食料を与えるより、農業に必要な道具類と種を、知識を与えるより、大工、溶接、林業、料理等作業の技術を、指導、ﾋﾞｼﾞﾈｽができるものを提供すべきかと思われます。中小企業には、海外需要を構築するという大きな事業ﾓﾃﾞﾙ（技術提供）が要求されているように思われます。

☞　おわりに

最近、日本語を喋れるﾍﾞﾄﾅﾑ人を対象に暇にまかせて会社経営について日本語で講義しています。「会社の利益は、給料は、だれから頂くのか」と質問しますと、大概のﾍﾞﾄﾅﾑ人は、「株主、取締役、社長」と言った返事がでてきます。経営意識の差は、大変なものがあります。日本的な経営方法の勉強会とともに、「自分で企業を設立し、全力投球で、事業を長期間にわたって展開すること、若い時分から、苦労してｽﾀｰﾄしなさい」と、将来の企業家が輩出することを期待して、激励もしています。

ﾍﾞﾄﾅﾑ HCM は、熱帯で結構暑く、疲れもたまりやすいので健康には注意しています。皆さん、HCM へおいでの際は、是非、ｺﾝﾀｸﾄをとっていただければと思います。

ｺﾝﾀｸﾄ先は、

ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　：　anan112358@yahoo.co.jp　or　s.anan@dongtam.com.vn

電話　　：　＋84903812449

参考に、雑誌の巻頭言を紹介させていただきます。

http://www.sailing-master.com/?cat=02

年末年始のHCMﾊﾞｲｸ群ﾊﾞｲｸ文化は、人間の寛容さを維持

旧正月の飾り付け状況昔の古きよき日本の正月

ＩＣＴ海外サポートメンバー顔合わせ合の開催

事務局

１０月２８日１８：３０から、五反田駅近くの居酒屋「さくら水産」でＩＣＴサポートグループの初会合が開催されました。

これはトンガで活躍中の鈴木弘道さんの一時帰国に合わせて開催したものです。生憎の雨模様でしたが、鈴木さんを含め８名のメンバーが参加し、海外で活躍中の主にＪＩＣＡ派遣で活躍中のメンバーに対するＩＣＴ技術の支援に関し意見交換しました。

概要次のように意見がまとまりました。

１．本活動のＰＲについて

本活動の拡大に関しては、従前どおり会報やＨＰを通じて行うほか、ＪＩＣＡ開催のイベント（ＪＯＣＶ，ＳＶ募集説明会等）の場を借りてＰＲすることを検討する。

２．組織の発展について

さし向きＩＣＴ海外支援サポート実績を積み上げて行く。

具体的にはトンガで鈴木さんが日本の総務省通信部門にあたる機関に所属して活動しており、「トンガ政府ミニＩＣＴ体制実現プロジェクト」の提案をして活動中である。このプロジェクトの実現に向けて支援して行く。

３．支援体制の進捗状況

山下支援グループ責任者から、ＩＣＴ技術支援ＤＢの構築の報告があり利用できる段階へ進展している、という報告があった。ＤＢの閲覧に関しては今後、関係者へ周知していくこととしたい。

本会入会者リレー寄稿 第６回

ボランティア活動を振り返って

メキシコ派遣中ＳＶ　横田　悦男

・・・再びメキシコへ着任・・・

１．プロローグ・・・応募の動機など

(独)国際協力機構（JICA）の、海外シニアボランティア活動に幸いにも合格して、再度メキシコへ派遣されたが、振り返れば、最初のシニアボランティア（ＳＶ）の応募時には、いろいろな思いが胸中を駆け巡った。

現役時代は決して、順風満帆の会社生活を送ったわけではなかったが、それでも第二の就職先で、そのまま慣れた仕事を続けていれば、十分とはいえないまでも、ある程度の収入は保証され、大過なく社会生活を終わったかも知れない。しかし過去には多く人から色々なことを教えられ、自分でも勉強した。これをそのまま活用することなく朽ちさせては、これもまた悔いが残るだろう。等々。

最後には、自分を育ててくれた社会に少しでも恩返しするのが、私の最終目標そのものになり、その中の選択肢として、「自分は中南米でボランティア活動をするのだ」という、思いを実現すべく、ＪＩＣＡの試験を受けた。

ミッションの一例（集中講義）

書類審査、語学試験、外国語面接、身体検査、最終面接試験など、ボランティア活動への応募という、こちら側の主体性による参加とは思えないほどのハードな試練を幸いにも通過して、会社を辞しミッションを始めた。感謝すべきは、この活動への参加に当たっては、会社も家族も最後には私のわがままを許してくれたことである。

長い会社生活の中では、“自分流の生き方で過ごす”、これは一見簡単なようで、実際に実行するのはなかなか難しく、命じられるままに、仕事内容も変わり、ポジションなどを変わってきたが、個人的なことを除いて自分の出処進退を自分で決めたのは、このSV参加という決断が初めてだろう。

この自分の強い意志による参加というのは、一つのキーワードとして重要で、SV応募の理由は個人によって色々あろうが、とにかく動機が弱いといずれの時期に、挫折感を味わうことになると思う。

２．配属先の状況・・・業務の内容など

派遣期間：「２００９年１月８日～２０１１年１月７日」、「ISO基準に基づく研究機関に対する品質管理体制の構築」というテーマが、私がボランティア活動としてのミッションで、配属先はメキシコ適合性認定協会（entidad méxican de acreditación）（通称ema）という、ISOの認定機関である。

約８０名の社員の内、女性が約６０％の比率で、全体のトップは女性、所属する部門のトップ（部長）（当時）も女性、当方の仕事の関係上、他部門との調整役を担ってくれる人も女性で、さらに管理職層も女性の比率が高く、日本に居たときの私の専門分野で

の、泥臭い男性社会で経験した職場とは違う緊張感がある。

それはさておき、いつものことながら、物事を始めるにあたっては、何から始めて良いか分からず頭を悩ますもので、要請内容と着任時の相手先の要求内容の相違、それに伴う自分の専門領域との乖離等。これに対しては相手と相談し、自分主導でことを進めるしかない。

具体的な業務は、要請に基づき、週３日間、一日約５時間、述べ１コースあたり１５時間を越える講義を、１００ページを超える自作のスペイン語で書いた教材を使って、演習を交えながら、メキシコでも有名な大学の研究者や国営の研究所の研究員を相手に、カウンターパートも殆ど付かない中で、自分ひとりで行くこともあるし、時により個別に指導を実施した。

ミッションの一例(グループ討議による演習)

博士なども混ざった高学歴者を相手なので、緊張を強いられる講義で、ゴルフに例えると、ダフリ（絶句)、チョロ（つっかえつっかえ)、トップ（上滑り)、パット決まらず（押さえどころの悪さ）の、お馴染みのゴルフスコア崩しスタイルと似た態様の、オンパレードだったと思っている。

３．カルチャーの違いでの葛藤・・・・三大禁句言葉など

ラテン民族が有している自由闊達的な性格と、過去の歴史的感情から来る内面的な反発心、第三世界のリーダーとして活躍し、中南米での盟主を密かに自認しているため、相手の思惑など気にしない、強烈な自己主張。ときにはこれらが混ざり合った、複雑な感情等々。

滞在国の国民性をあまねく語るのは難しいが、私の感じている彼らの性格の一面性である。中南米では、「アミーゴ（友達)」という言葉と、「シンパティコ（感じが良い)」という言葉は、辞書に載っている語感から直訳的に感ずる以上に重く、これは社会生活上重要な言葉の一つだと思う。

彼らを見下げるような態度を取る人は、概して評判が悪くなり、シンパテイコの対極にある、「アンティパティコ（感じが悪い)」と彼らに判断されれば、当然アミーゴにはならない。この感覚の差は歴然で、生活が味気ないものとなったり、業務遂行上都合が悪くなる可能性がある。

相手に、「教える」などと言う大上段から構えた大層なことよりも、相手から何を聞かれても、即座に答えられるように事前準備を十分に行い、聴講生と一緒に考える雰囲気を作ろうと努力しながら、良好な人間関係を保とうと心がけるしかない。

ミッションの一例(個別指導)

少しは自己自慢を交え、しかも矛盾の論理だが、謙譲の美徳を兼ね備え、礼儀正しく話すよう心がけようと思ったのである。まさに、論語に言う、「和して同ぜず」の言葉そのものである。

外国から来ている専門家だから、何でも知っているだろうとの勝手な推測などで、私の

専門分野以外の質問を受けたり、先進諸国への研修などで行った人などは、一般的な知識にはある程度精通していて、当方を値踏みするため、あるいは知識の再確認の意味で質問をしてくる。

このときの対応の仕方によって、自分の評価に重大な影響を及ぼす。私は、中南米の業務実施における、「３大禁句」と密かに称している、「それは知りません。そのことはできません。すみません」と言う言葉だが、これを言えば少なくとも専門家としての評価が下がる。

専門馬鹿に陥らないように、日頃から幅広く色々なことを勉強しておくことも大事で、講義の中では質問により、自分の担当テーマの講義以外に、他の専門家の領域にかかわることも相当説明した。

今回のミッションのような、経営管理的な内容の技術を教える場合、実技を伴った指導科目と違って、「俺のやり方を見て覚えろ」の流儀を実施できず、身振り手振りだけでは、意志の伝達と言う面からはとても覚束ない。すべて言葉と文字で意志の伝達を必要とするので、ある程度の現地語の会話力は必須である。

過去に経験した、JICA 派遣の専門家のときは、送り出した側の後ろ盾があり、分からない事項は関係者に問い合わせることで、解決できたが、SV という自分の意志で参加したミッションには、相談する相手もおらず一人悩むことになる。

しかも、大学の教官相手、いわゆる教育のプロを相手に教えると言うことは、予期せぬ問題が生じたこともあった。ISO の条文解釈だけの講義では退屈すると思い、ある大学で、品質管理に関連する業務分析手法を演習に取り入れた。

当地で誰でも知っている料理方法を例にして、演習をした際、一人の男性受講者から、「なぜ我々が料理方法を勉強しなければならないのか」と、講義の中で抗議？を受けた。

一般論として誰でもわかるように、あえて料理方法を共通話題として使ったのだが、彼には不満だったのだろう。次回からこのことを事前に断りを入れてから演習に入ったのは言うまでもない。

このあたりの対処を間違うと、講義終了後の評価測定の為の、アンケートなどで強烈なコメントをくらう。以上述べたことを別の言葉で言い換えると、技術を教わる彼ら自身が、我々個・個人の業績評価を、絶えずしているようなものである。

業績評価に情実がなく、彼らなりの感覚にしたがって、対象相手の実力を判断しているだけに当人にとっては厳しいが、それだけに本気で業務に取り込んでいる者にとっては、今の活動は緊張することは多いものの、やりがいがある仕事というものだろう。

４．エピローグ・・・思うこと

スペイン語の諺に、「Si el final concluye bien, todo ha estado bien.」（シー　エル　フィナル　コンクルーエ　ビエン　トード ア　エスタード　ビエンと発音し、直訳は、「もし最後が上手く終われば、すべてが良かったことだ」という意味である）。日本語では有終の美を飾るなどの言葉が思い起こされる。

この諺の意味を考えると、私はここメキシコで、一体何をしてきただろうかと、少しば

かり不安感が頭をよぎる。日本人の評判を落とさないためにも、「それは知りません。そのことはできません。すみません」の３大禁句は使わず、配属先の要請には最大限応えてきたと自負しているが、私のミッションは成果という面では、すぐには現れてこないが、派遣した側としては当然成果を求めてくるし、派遣先もどう評価しているかわからない。

しかし自分自身の側に立って考えると、男は人生を過ごす間に、何処かで一度ならず冒険してみたいと考える人も多いと思うが、私にとって現在の自らの意志による海外勤務は、そのたった一度の冒険だったのかも知れないし、また自分に何が欠けているかを、はっきり認識する機会でもあったのだと思う。

この仕事を終えるにあたって思うことは、客観的条件から次の SV に挑戦する機会はもう無いが、いつの日か自分が過去に仕事をして来た国々を再度訪問し、滞在していた当時と比較して、どの様に変化しているか、自分の過去の仕事の証を、自分の目で確かめて見たいということである。

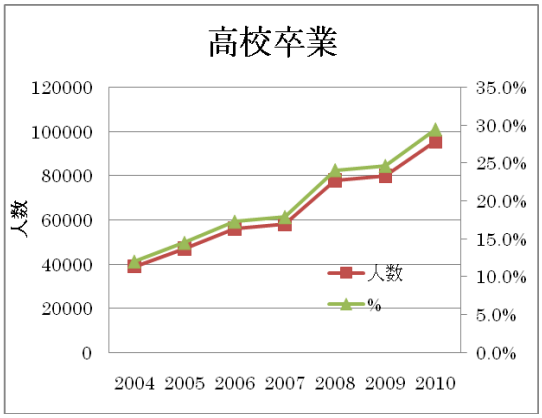
そのときこそ自分の成果が問われるときだと思っている。

現地たより

カンボジアの高等技術教育について

カンボジア派遣中ＳＶ　　須山　勝彦

1.　プレアコソマ技術学院の歴史



当校は 1965 年にフランスの援助で「カンボジア電気学校」として創設された。ポルポト政権下で閉校されたが、1981 年に旧ソ連の援助で「カンボジア・ソ連友好職業訓練センター」として再開された。ソ連崩壊後の 1992 年、「プレアコソマ職業訓練センター」として再発足した。この時から JICA 青年海外協力隊の派遣が始まり、6 年間で 7 名の隊員が自動車整備、工作機械、電気・電子機器などの技術支援にあたった。当時は中学卒を対象とした 1 年または 2 年コースであった。1996 年、ADB（アジア開発銀行）が職業訓練分野の強化のための総額 1500 万ドルの援助を決め、1999 年 10 月からコースの強化・再編が行われた。

職業訓練センター	学科	コース（期間）
プレアコソマ	土木、電気、電子	高校：Certificate（3 年） 短大：Highly Diploma（2 年）
ルッセイケオ	自動車整備、工作機械、冷房・空調機器	

プレアコソマ職業訓練センターは「土木」、「電気」、「電子」の学科を担当することになり、その他はルッセイケオ職業訓練センターに移管された。

プレアコソマ職業訓練センターは 2 つの校舎（キャンパス）から成るが 2001 年にそれぞ

れが「プレアコソマ技術学院」(PPI)と「国立技術訓練学院」(NTTI)に分離独立した。その後、両校で大学コースを新設し、2007 年には PPI が NTTI の敷地内に移転した。さらに現在新築中の校舎に「工業技術学院」(旧ルッセイケオ職業訓練センター)が移転する予定であり、労働職業訓練省所管の主な高等技術学校がまもなく 1 か所に集結することになる。

2001 年以降の JICA の支援はシニア海外ボランティア派遣になり、各学校に対し、以下の支援が行われている。

学校名	専門分野	SV の人数（活動中で内数）
プレアコソマ技術学院	IT、電気、電子、土木	14 名（3 名）
国立技術訓練学院	IT	2 名（1 名）
工業技術学院(旧ルッセイケオ)	工作機械、自動車整備	7 名

2. 高等技術教育の最近の動向

カンボジアの経済は 2000 年以降、年率 10%の勢いで順調に発展している。1 人当たり GNP は 2000 年の 287 ドルから 2008 年の 710 ドルに増えた。昨年は世界経済不況の影響で停滞したが、今年は 5%台の経済成長が予想される。

経済の発展に伴い人々の生活も豊かになり、高等教育のニーズが高まっている。右図で示すように、高校卒業生が 2005 年の 47,000 人(同年令人口の 15%)から 2010 年の推定 95,000 人(同 29%)へ倍増した。それに伴い大学へ進学する学生も増加する。

JICA「メールマガジン配信登録」のおすすめ

事務局

当会顧問・JICA 青年海外協力隊事務局募集課長 佐藤　睦氏からのおすすめです。SV および JOCV 募集案内等情報満載の「メールマガジン配信登録」をしてください。きっと皆様のお役に立つと思われます。

手順は次の通りです。

① Internet Explore で「JICA」を検索
② 「JICA-国際協力機構」を選択し HP を開く
③ 右手の JICA ボランテイアをクリック
④ 情報満載メールマガジンをクリック
⑤ メールマガジン配信登録をクリック

⑥ 所定の個人情報を記入

- (http://www.jica.go.jp/volunteer/index.hotmail)

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。
それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集部　加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp),または
村上勝臣(katumi.muakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

・今号の巻頭言には、ベトナムで活躍中の阿南さんからいただきました。氏はスリランカテレコムでも革新的な業務をなさいました。ベトナムでも今までの豊富な経験と進取の気鋭できっと困難を乗り越えて大成なさることを確信しております。ご健闘をお祈りしております。

・山下幹事が中心となって組織的に進められている「ＩＣＴ海外サポート」は、私の経験からしても、活躍中のボランティア諸氏諸嬢にとってこの上なく大きな支えになることと思います。この活動は当会の設立趣旨の具現化に大きく弾みがつくものと考えております。

・「リレー寄稿」としてメキシコで活躍中の横田さんから、また「現地たより」としてカンボジャで活躍中の須山さんから、それぞれ寄稿していただきました。阿南さんも指摘されておりますが、技術移転で大切な人材育成に、誠心誠意取り組んでおられる様子が滲み出ており敬意を表したいと思います。

・最近入会者にＮＴＴ関連以外の方々も増えてきており、頼もしく感じております。
私はＪＩＣＡメールマガジン配信登録を一足早く済ませました。募集案内など時機を得た豊富な情報が満載で大いに役立っております。(以上 加藤)

・先般、ＮＴＴコミュニケーションズの『フォーラム２０１０』の講演会を聴く機会を得ました。講師の岡本行夫氏は「グローバル化した世界でリードする企業の指導者条件」について豊富な海外生活を踏まえて話しました。その中で彼は説明しました。「IT 産業で注目されているのはインドである。真のことはわからないが、インド語（ヒンズー語）はコンピュータのプログラムを組むのに、非常に便利に出来ている」。私は理由抜きに驚きました。今回巻頭言に阿南さんからベトナムで言語の理解と戦いながら奮闘している模様を紹介してもらいました。それぞれ言葉はコミュニケーションの基本である事を実感した２カ月でした。(村上)

(以上)

総編集長　：ICT 海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ会　事務局長　加藤隆
編集長　：ICT 海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ会　村上勝臣
発行　：　ICT 海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ会
メール　：sv@info.nttob.org